

アタッチメント発達の予兆：
妊娠期における母親の子ども表象に着目して

本島 優子
上越教育大学学校教育学部

要旨

本稿では、妊娠期における母親の子どもについての表象に着目し、その母親の子ども表象を測定するツールとして **Working Model of the Child Interview (WMCI)** を取り上げ、これまで報告されてきた **WMCI** の実証研究の知見に関して、特に日本での筆者らの研究成果を中心に概観した。筆者らの一連の知見をまとめると、①妊娠期における母親の子どもについての表象が生後 18 ヶ月の子どものアタッチメント安定性と関連すること、②妊娠期の母親の子ども表象が子どものアタッチメントに及ぼす影響プロセスとして、母親の養育行動が媒介的役割を果たしていることが示唆された。最後に、この研究領域における今後の課題や問題点について議論した。

1. 親の主観性——妊娠期からの始まり

近年、親子関係における主観的側面の重要性がますます認識されるようになってきている^[24]。臨床領域では、親の子どもに対する主観的な知覚や解釈の仕方における個人差に関心が寄せられ、親の表象、知覚、解釈といった主観的側面が親—乳幼児心理療法における主要な要素として着目されるようになってきている^[19]。また、実証研究的にも、これまで客観的現実と比べてバイアスを含んだものとして過小に評価されてきた親の主観性が、それ自体、価値ある研究の対象として注目されるようになり、現在、急速な勢いでその体系的検証が進められている^[28]。

このように臨床的にも実証研究的にも親の主観的特性に関心が寄せられるなかで、近年より大きな関心を集めているのが、まだ子どもが生まれる前の妊娠期の段階から形成されている親の子どもについての表象である。親が子どもに対して抱く主観的な知覚や解釈は、必ずしも現実の子どもの誕生と同時に形成されるものではなく、親は客観的な子どもの情報が限られている妊娠期の段階から、すでに胎内の子どもに関する表象やイメージを作り上げているのである。

2. 妊娠期における母親の子ども表象の発達プロセス

では、妊娠期における親の子どもについての表象やイメージはどのように発達していくのだろうか。ここでは、本島^[12]を参考に、妊娠期における母親の子どもについての表象やイメージの発達プロセスを見ていく。

妊娠初期は、つわりや吐き気、不快感など急激な身体的、生理学的変化が現れるものの、母親にとって胎内の子どもの存在はまだまだ実感し難いものである^{[5][6]}。Lumly^[11]は、妊娠8～12週の母親のインタビューのなかで、その多くが望んだ妊娠であったにもかかわらず、母親の胎内の子どもへの感情的表現は希薄であり、子どもの存在感が乏しかったことを明らかにしている。したがって、この時期における母親の子どもについての表象やイメージは、多くの場合、きわめて曖昧で茫漠としたものに止まるようである。

母親の子どもについての表象やイメージが急速に発達するのは、通常、胎動が始まる頃からであり^{[2][19]}、この胎動が大きな契機となって、胎内の子どもの存在がよりリアルに実感され始める。上述した Lumly^[11]の追跡研究では、妊娠18～22週になると、胎内の子どもを「人間」として感じられる母親の割合が63%にも急増したことが報告されている。この妊娠4～7ヶ月においては、子どもに関する表象が、その豊かさや特殊性、量において、

急速に成長していく^[19]。しかし、こうした母親の表象は、一見このまま出産まで豊かに発達し続けそうであるが、実のところ、妊娠7ヶ月頃にピークを迎えると、それ以後の発達は停滞するらしい。Stern^[19]によれば、そこには、母親の表象上の子どもと現実にも生まれた子どもとの間で生じるギャップや失望を最小限に防ぐための心理的機制が働いているのではないかという。

おそらく、こうしたこともあり、妊娠中期に急速に発達した母親の子どもについての表象やイメージは、妊娠後期に入ると、徐々に収束していき、母親個人内で、ある程度一貫性を持った、安定した表象やイメージができあがってくるようである^[6]。実際、Zeanah, Keener, Stewart, & Anders^[27]は、妊娠33週と37週に、生まれてくる子どもの気質について、母親に想像で質問紙での評定を求めたところ、妊娠33週の評定と妊娠37週の評定との間で有意な相関を示したことを認めている。したがって、想像に基づく母親の気質評定は、決してランダムなものではなく、母親の中ではある程度一貫性を持った気質イメージが形成されているといえるだろう。同様に、子どもの性格に関しても、すでに妊娠後期には、具体的で明瞭な性格イメージが成り立っているとされる^[28]。このように、妊娠後期には、母親個人内で、ある程度一貫性を持った子どもについてのイメージや表象が形成されており、それは同時に、子どもについてのイメージや表象上に現れる、母親自身の個人的な特徴がより明確に浮かび上がってくるともいえる。つまり、妊娠後期には、子どもに関する母親一人ひとりの個人的な表象のパターン、あるいはその個人差が顕著に現れ始めるのである^[6]。

3. 妊娠期における母親の子ども表象の個人差：WMC I による測定

近年、こうした妊娠期から存在する、個々の母親の子どもについての表象の特徴およびその個人差に着目し、それを実証的に把握しようとする動きが、殊にアタッチメント研究領域において、高まっている。本稿では、そうした母親の子どもに関する表象を測定するツールとして、この領域でもっとも広く用いられているインタビューの一つである Zeanah & Benoit^[25]の Working Model of the Child Interview（以下 WMC I とする）を取り上げる（なお、その他の表象の測定ツールについては、本島^[12]のレビュー論文を参照されたい）。WMC I は、子どもや子どもとの関係性についての親の主観的な知覚や経験を評定するための約1時間程度の半構造化インタビューである。インタビューでは、子どもの性格や個性、発達的变化、子どもの扱いにくい行動、子どもとの関係性、子どもの将来な

どに関する質問が尋ねられる。具体的な質問項目を Table1 に示す。なお、WMCI は本来、生後 0～5 歳の子どもの持つ養育者を対象としたインタビューではあるが、質問項目を未来形に変えることで、妊娠期に実施することも可能である^[25]。

インタビュー反応は、Zeanah, Benoit, Barton, & Hirshberg^[26]に従って、以下の下位スケールに関して 5 段階で評定が行われる。①知覚の豊かさ：子どもや子どもとの関係性に関する描写の豊かさの程度。②変化への開放性：子どもに関する新しい情報を適用できる表象の柔軟性の程度。変化や修正の可能性。③関与の強さ：子どもへの情緒的関与や心理的夢中の程度。④一貫性：子どもに関する描写や感情の全体的な整合一貫性の程度。⑤養育の敏感性：子どもの欲求や情動状態に対する適切な認識や応答の程度。⑥受容：子どもや子どもの養育に伴う挑戦や責任の受容の程度。⑦乳児の困難さ：子どもを世話することや子どもとの関係を築くことへの困難さの程度。⑧安全への恐れ：子どもを失うことへの非合理的な恐れ。⑨情緒的トーン：表象の主要な情緒的テーマ。喜び、怒り、不安、無関心などの強さ。これらの下位スケールの評定に基づいて、最終的に母親の語りの反応は以下の 3 つのタイプに分類される。

一つ目が「安定型 (Balanced)」の表象タイプである。安定型の表象は、子どもについての描写が豊かで、柔軟で、一貫性があり、子どもへの情緒的関与や受容が高く、全般的にポジティブな情緒的トーンが目立つ。養育者は、子どものポジティブな側面のみならず、ネガティブな側面に関してもバランスよく自由にオープンに語る事ができる。

二つ目が「非関与型 (Disengaged)」の表象タイプである。非関与型の表象は、主に子どもへの情緒的関与の欠如によって特徴づけられる。子どもに関する描写は乏しく最小限であり、情緒的抑制が顕著で、子どもについて知的に冷ややかに語られる。また、養育の敏感性や受容が低く、子どもへの無関心が目立つ。

三つ目が「歪曲型 (Distorted)」の表象タイプである。歪曲型の表象は、子どもへの関与は認められるものの、表象内にある種の歪みや偏りが認められる。例えば、養育者が他の関心事に心を奪われていたり、子どもに対して混乱、圧倒されていたり、子どもとの関係性において役割逆転が認められたりする。子どもについて多くのことを語るものの、その語りは、混乱矛盾し、まとまりがなく、整合一貫性が低い。感情の表出が激しく、特にネガティブな感情 (怒り、不安など) が顕著に表出される。

4. WMCI を用いた妊娠期における母親の子ども表象に関する実証研究

上述した WMCI インタビューを用いて、妊娠期における母親の子どもについての表象を評価した実証研究がこれまで報告されている。たとえば、Benoit, Parker, & Zeanah^[3]は、妊娠後期の母親 96 人（初産婦、経産婦共に含む）を対象に WMCI インタビューを実施したところ、64%の母親が安定型に、12%の母親が非関与型に、24%の母親が歪曲型に分類された。また、妊娠後期の母親 204 人（初産婦、経産婦共に含む）を対象とした Huth-Bocks, Levendosky, Bogat, & von Eye^[9]の研究では、52%の母親が安定型に、30%の母親が非関与型に、18%の母親が歪曲型に分類された。

一見すると、妊娠期の母親の子どもに関する表象は、出産という現実の子どもの誕生によって、劇的に変化しそうに思われる。しかし、予想外にも、これまでの実証研究は、妊娠期の母親の子どもについての表象が、妊娠期という一時点を超えて、出産後も時間的にかなり安定したかたちで連続する性質を持っていることを示している。たとえば、Benoit ら^[3]は、妊娠後期と生後 11 ヶ月に母親に WMCI インタビューを実施したところ、全体として 80%の母親において、妊娠期と生後 11 ヶ月の子ども表象のタイプが一致していた。同様に、Theran, Levendosky, Bgat, & Huth-Bocks^[20]の研究でも、全体の 71%の母親において、妊娠後期と生後 12 ヶ月の子ども表象のタイプが一致していた。

さらには、こうした妊娠期の母親の子どもについての表象は、時間的に安定して連続する性質を持つというだけでなく、興味深いことに、出生後の子どものアタッチメントの発達にも一定の影響を及ぼすことが知られているのである。たとえば、Benoit ら^[3]は、妊娠期の母親に WMCI インタビューを用いて母親の子どもについての表象の評価を行い、生後 12 ヶ月にストレンジ・シチュエーション（以下 SS とする）を用いて子どものアタッチメントの測定を行ったところ、全体の 74%の母子ペアにおいて、理論的に想定された通りの、母親の表象タイプと子どものアタッチメントタイプとの一致（安定型（WMCI）－安定型（SS）、非関与型（WMCI）－回避型（SS）、歪曲型（WMCI）－アンビバレント型（SS））を示した。特に、安定型の表象を有する母親において一致率が高く、妊娠期に安定型であった母親の、実に 91%の子どもが、生後 12 ヶ月において安定したアタッチメントタイプを示したのである。同様に、Huth-Bocks ら^[9]の研究でも、全体の 60%の母子ペアにおいて、妊娠期の母親の子ども表象のタイプと生後 12 ヶ月の子どものアタッチメントのタイプが一致していた。

このように、妊娠期に母親が子どもに関してどのような特質の表象を形成しているかが、生後 1 歳の子どもアタッチメントの質を予測し得るとするのは、とても興味深くインパクト

トのある知見である。物理的な相互作用のみならず、主観的な表象もまた、親子の関係性の主要な要素として認識されているが^[19]、こうした主観的な表象面も含めると、(母親の表象レベルでの) 親子の関係性はすでに妊娠期から構築されており、それが出産後の親子のアタッチメント関係の形成に一定の方向性を持たせるのかもしれない。

5. 日本における WMCI を用いた妊娠期の母親の子ども表象の検証

では、こうした実証的知見は、日本人サンプルを対象とした際にも、同様に確かめられるのだろうか。アタッチメント研究全般に言えることだが、特に母親の子ども表象の研究はそのほとんどが欧米圏で行われており、それを東洋の文化圏で行うことには一定の価値があるといえる。養育形態や養育をめぐる様々な文化的信念の差異は、養育者と子どもとの関係性に深く影響を及ぼすことが想定されるため、欧米圏で得られた結果の方向性が日本においても同様に取り出されるという保証はなく、またそこに日本文化固有の介在要因が見出される可能性もある。こうしたことに関わる知見は、この領域の研究に新たな展開を生むことになろう。そこで、本島・遠藤^[15]は、日本人サンプルをターゲットに、国内では数少ない妊娠期からの縦断デザインによる研究を計画し、その実施を試みた。そして、妊娠期(妊娠 35 週前後)の母親を対象に、WMCI インタビューを実施し、母親の子どもについての表象の評価を行った。本島・遠藤^[15]の予備的結果(母親 31 名の分析結果)では、安定型が 39%、非関与型が 29%、歪曲型が 32%という結果となった。まだ予備的結果の段階ではあるが、安定型の割合が 64%^[3]、もしくは 50%^[9]と報告されている米国での結果と比較すると、やや安定型の割合が低いという結果となった。これまで、産後うつ^[23]、パートナーから暴力を受けている母親^[10]、発育不全など臨床的問題のある子どもを持つ母親^[4]など、ハイリスクの母親においては、安定型の割合が著しく低いこと(9~33%)が報告されている。本研究では、一般的な母親を対象としたつもりではあったが、意図せずとも、結果的にハイリスクに近い母親が集められた可能性もあるかもしれない。あるいは、サンプリングの問題というよりは、欧米圏とは異なる日本の文化的特徴が反映されている可能性もあるのかもしれない。サンプリングの問題なのか、それとも文化的特徴なのか、今すぐ結論的なことを言える段階ではないが、この点に関しては、今後さらにサンプルサイズを広げて慎重に検討していくことが必要であろう。

また、本島・遠藤^[15]は、先行研究で得られた妊娠期の母親の子どもについての表象と乳児期の子どものアタッチメントとの関連性を追試的に検証するため、生後 18 ヶ月に

Waters & Dean^[22]アタッチメント Q ソート法 (以下 AQS とする) を用いて子どものアタッチメント安定性の測定を行った。AQS では、家庭訪問での約 2 時間程度の観察に基づき、子どもの行動について記述された 90 枚のカードを、それぞれ 1:「まったく当てはまらない」から 9:「非常に当てはまる」までの 9 段階に 10 枚ずつ振り分け、各カードにその段階の得点を付与する。そして、予め複数の専門家によって判断されたもっともアタッチメントが安定している子どもの基準配列の得点^[21]と、実際の観察で得られた子どもの配列得点との相関を求め、Fisher の z 変換した値が子どものアタッチメント安定性得点とされる。値は、おおよそ-1.00~1.00 をとり、得点が高いほど、専門家が想定したアタッチメントが安定している子どもの行動パターンに近似することになり、アタッチメント安定性の高さを意味する。そして、妊娠期に WMCI で測定された母親の子ども表象と生後 18 ヶ月に AQS で測定された子どものアタッチメント安定性との関連性を検討したところ、妊娠期に子どもについての表象が安定型であった母親の子どもは、妊娠期に非関与型もしくは歪曲型であった母親の子どもよりも、生後 18 ヶ月におけるアタッチメント安定性がより高かったことが示された (Figure1)。アタッチメントの測定手法の違いはあるものの、日本人サンプルにおいても、米国の先行研究と同様に、妊娠期の母親の子どもについての表象が乳児期の子どものアタッチメントを予測し得ることが実証的に確かめられたといえる。実験場面で測定された子どものアタッチメントに限らず、より日常場面に即した子どものアタッチメント行動に関しても、妊娠期の母親の子どもについての表象との関連性が見出されたことはとても意義深いだろう。

6. 妊娠期の母親の子ども表象が子どものアタッチメントに及ぼす影響プロセスの解明

以上より、妊娠期における母親の子どもについての表象が乳児期における子どものアタッチメントと関連することが、米国のみならず、本島・遠藤^[15]の日本人サンプルにおいても実証的に確かめられたわけではあるが、では妊娠期における母親の子どもについての表象がなぜ、もしくはいかにして出生後の子どものアタッチメントの発達に影響するのだろうか。実はこの問題に関しては未だ十分に解明されておらず、そのプロセスおよびメカニズムを明らかにしていくことが重要な課題とされている^[18]。その際、当然想定されるのが、親の養育の媒介的役割である。すなわち、妊娠期の母親の子どもについての表象が出産後の母親の養育の質に影響し、ひいてはそれが子どものアタッチメントに影響するというプロセスである。この点に関して、Benoit ら^[4]は興味深い示唆を与えている。WMCI インタ

ビューで安定型とされる母親は、子どもの欲求や情動を的確に認識し、一貫して敏感に適切なかたちで応答することができる。一方、非関与型の母親は、子どもから心理的に脱愛着しており、子どもの欲求や情動状態に対して鈍感で拒否的で無関心であったりする。また、歪曲型の母親は、情動表出（しばしばネガティブな情動）が過剰であり、子どもに非現実的な期待を抱いたり、奇妙な意図や欲求を帰属したり、歪んだ認知が目立つ。結果として、こうした親の養育スタイルが子どもの発達に一定の影響を及ぼすのではないかと推測されるのである^[4]。

そこで、遠藤・本島^[8]は、Benoit ら^[4]が想定している影響プロセスを実証的に検証すべく、母親の養育の媒介的役割に着目し、その出発点として、まずは妊娠期の母親の子どもについての表象と出産後の母親の養育との関連性の検討を行うこととした。具体的には、生後2ヶ月に母子相互作用場面の観察を行い、そこでの母親の行動、特に敏感性とポジティブ感情について評定を行った。敏感性とは、子どものシグナルやコミュニケーションを正確に解釈し、適切にかつ即座に応答する母親の行動を指し、Ainsworth, Bell, & Stayton^[1]の尺度に基づき評定した。また、母親のポジティブ感情（喜び・楽しさ・温かさなど）については、本島・遠藤^[4]に基づいて評定した。そして、これら母親の行動と妊娠期に WMCI で測定された母親の子どもについての表象との関連性を検討したところ、妊娠期に子どもについての表象が安定型であった母親は、妊娠期に非関与型および歪曲型であった母親よりも、生後2ヶ月において子どもへの敏感性がより高く、子どもへのポジティブ感情の表出がより多かったことが示されたのである（Figure2）。また、生後6ヶ月において、母子相互作用場面での母親の敏感性について再度評定を行ったところ、やはり妊娠期に安定型であった母親は、妊娠期に非関与型および歪曲型であった母親よりも、生後6ヶ月において子どもへの敏感性がより高かったことが認められた。

さらに、本島^[3]は、養育の認知的側面として、母親の情動認知についても取り上げ、生後2ヶ月に IFEEL Pictures^[7]の日本版^[6]を用いて、母親の情動の読み取り反応の測定を行った。IFEEL Pictures は、さまざまな表情をした乳児写真に対する母親の情動の読み取り反応を把握するものである。そして、妊娠期に WMCI で測定された母親の子どもについての表象と、生後2ヶ月に IFEEL Pictures で測定された母親の情動の読み取り反応との関連性を検討したところ、妊娠期に子どもについての表象が歪曲型であった母親は、妊娠期に安定型であった母親よりも、どの情動カテゴリーにも当てはまらない特異的な情動（侮蔑など）の読み取りや、単なる行動の記述などの反応がより多かったことが示され

た。妊娠期に歪曲型であった母親は、生後 2 ヶ月に呈示された乳児表情写真に対して、的確に乳児の情動を読み取ることが相対的に不得手であったといえるだろう。

これらの結果から、妊娠期に母親が子どもについてどのような表象を形成しているかが、出産後の母親の感性やポジティブ感情といった養育行動のみならず、情動認知などの養育の認知的側面に対しても、一定の影響を持つことが示唆された。

それでは、これら妊娠期における母親の子どもについての表象と関連した出産後の母親の養育が、ひいては後の子どものアタッチメントと関連するのだろうか。この問いについて検討するため、遠藤・本島¹⁸⁾は、生後 2 ヶ月の母親の感性、ポジティブ感情および生後 6 ヶ月の母親の感性と生後 18 ヶ月に AQS で測定された子どものアタッチメント安定性との関連性について、両変数間の相関分析を行った。その結果、生後 2 ヶ月における母親の感性と生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性との相関係数が $r=.52$ ($p<.05$)、生後 2 ヶ月における母親のポジティブ感情と生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性との相関係数が $r=.62$ ($p<.01$)、生後 6 ヶ月における母親の感性と生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性との相関係数が $r=.49$ ($p<.05$) となった。いずれも、感性が高い母親の子どもほど、あるいはポジティブ感情が高い母親の子どもほど、後のアタッチメント安定性が高く、母親の養育行動と後の子どものアタッチメントとの関連性が確かめられた。ただし、養育の認知的側面である母親の情動認知に関しては、生後 2 ヶ月における母親の情動の読み取り反応（特異的な情動の読み取りや単なる言動の記述）と生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性との有意な相関は認められなかった ($r=-.13$)。

以上、遠藤・本島¹⁸⁾の研究結果を総合的に踏まえると、妊娠期の母親の子どもについての表象は、出産後の母親の養育、特に感性やポジティブ感情と関連し、ひいてはそれらが後の子どものアタッチメントと関連することが認められ、妊娠期の母親の子どもについての表象が子どものアタッチメントに及ぼす影響プロセスとして、母親の養育行動が媒介的役割を果たしていることが示唆された。これまでアタッチメント研究では、とりわけ母親の感性に注目されることが多かったが、遠藤・本島¹⁸⁾の研究では、母親の感性のみならず、ポジティブ感情もまた、重要な媒介的役割を果たしていることが示唆された。この点に関して、Rosenblum, McDonough, Muzik, Miller, & Sameroff¹⁸⁾の研究でも、生後 7 ヶ月に WMCI で評定された母親の子どもについての表象が、Still Face 法（養育者が乳児との相互作用の後に静止顔をして一時的に乳児に対して無反応状態となり、その後再び

相互作用を再開するという実験)での再関与場面(乳児に対して静止顔をした後に再び乳児と相互作用し始める場面)で母親が表出するポジティブ感情を媒介として、同時期の Still Face 法での乳児の情動制御と関連したことが報告されている。したがって、母親のポジティブ感情は、母親の子ども表象とアタッチメントや情動制御などの子どもの社会情動発達との関連を媒介する役割を果たしていると考えられる。従来アタッチメント研究で重視されてきた感性のみならず、介在要因として養育の情緒的側面もまた重要な役割を果たしていることが示唆され、母親の子どもについての表象が子どものアタッチメントの発達に及ぼす影響プロセスの道筋が徐々に明らかにされつつあるといえるだろう。

7. 妊娠期の母親の子ども表象の研究における今後の課題

本稿では、妊娠期における母親の子どもについての表象に着目し、その母親の子ども表象を測定するツールとして Working Model of the Child Interview (WMCI) を取り上げ、これまで蓄積されてきた WMCI の実証研究の知見に関して、特に日本における本島・遠藤^[8]の研究成果を中心に概観してきた。改めて一連の知見をまとめると、①すでに妊娠期から母親は子どもに関する表象を発達させており、WMCI インタビューによって個々の母親の子どもについての表象の特徴およびその個人差を把握することができること、②母親の子どもに関する表象は妊娠期から出産後にかけて時間的に安定して連続する傾向があること、③妊娠期における母親の子どもについての表象が乳児期における子どものアタッチメントと関連すること、④妊娠期の母親の子どもについての表象と乳児期の子どものアタッチメントの関連性を説明するプロセスとして、母親の養育行動が媒介的役割を果たしていることが結論づけられる。このように、WMCI インタビューを用いて、妊娠期における母親の子ども表象に関して、国内外問わず、新たな知見が蓄積されつつあるわけだが、その一方で、まだまだ検証が必要な点や残された課題も少なくない。

まず第一に、妊娠期における母親の子どもについての表象の形成に関わる要因の解明の必要性が挙げられる。これまで、母親の幼少期のアタッチメント経験^[9]、パートナーからの暴力の被害^[10]と WMCI の母親の子ども表象との関連性が報告されているが、これらの要因以外にも、望んだ(もしくは計画した)妊娠、母親の精神的健康(抑うつ不安など)、夫婦関係、ソーシャルサポート、社会経済的状況などの要因もまた、母親の子どもについての表象の形成に関わっている可能性が推測される。これらの要因がどのように作用しながら、妊娠期の母親の子どもについての表象の形成に関わっているのか、より詳しく検討

していく必要がある。

次に、妊娠期の母親の子どもについての表象と生後の子どものアタッチメントとの関連性を説明するプロセスやメカニズムに関して、さらなる詳細な解明の必要性が望まれる。むろん、遠藤・本島^[8]の研究により、母親の養育行動、特に感性やポジティブ感情が媒介的役割を果たしていることが示唆されてはいるが、その説明力は相対的に中程度に留まることを考えると、当然、一つや二つの行動変数ですべてを説明できるわけではなく、その他の媒介要因にも目を向ける必要があるだろう。近年、養育者の内省的機能 (reflective functioning) (自己や他者を心的状態の観点から内省・理解する能力; Fonagy et al., 2002) が媒介要因の一つとして新たに注目され始めており^[17]、今後は親の養育行動のみならず、こうした親の認知機能も含めて、より包括的にそのメカニズムやプロセスの解明を追究していくことが求められる。

また、これまでアタッチメント研究領域では、全般的にアタッチメントの連続性や母子間のアタッチメントタイプの一致など、連続性や一致の側面に注目されることが多かった。同様に、母親の子どもについての表象の研究に関しても、妊娠期から出産後にかけての子ども表象の時間的連続性や、母親の子ども表象のタイプと子どものアタッチメントタイプとの一致の側面が特に強調されてきた。しかし、その一方で、妊娠期から出産後にかけて子ども表象が変化する母親も 2~3 割程度存在すること^{[3][20]}、また妊娠期における母親の子ども表象のタイプと乳児期の子どものアタッチメントのタイプが (理論的に想定されたものとは) 一致しないケースが 3~4 割程度存在すること^{[3][9]}も指摘されている。実のところ、子ども表象の時間的連続性や母子間のタイプの一致は、特に安定型の母親において顕著に高く、非関与型や歪曲型の母親においては、総じて変化や不一致が生じやすいことが知られている^{[3][20]}。実際に、遠藤・本島^[8]の研究でも、妊娠期に母親が非関与型であったにもかかわらず、その子どもが生後 18 ヶ月に比較的安定したアタッチメントを示したケースが複数存在していた。こうした理論的に想定したものとは異なる母子間のギャップがどのようにして生じるのか、その解明を試みることはこの領域の研究に新たな展開を生むことになるだろう。すでにその先駆的研究も始まっており、妊娠期から出産後にかけての母親の子ども表象の変化に関わる要因を検討した Theran ら^[20]は、非関与型や歪曲型から安定型への変化には、うつ症状の低さ、シングルマザーの割合の少なさ、同一のパートナーとの関係継続、高収入などの要因が、反対に安定型から非関与型もしくは歪曲型への変化には、シングルマザーの割合の高さ、パートナーからの暴力、低収入などの要因が関係

していたことを明らかにしている。連続性や一致の側面のみならず、変化や不一致の側面にも着目することで、今後新たに有意義な知見が得られるものと期待され、さらに検証を加えていくことが必要である。

次に、妊娠期の母親の子どもについての表象がアタッチメントを含めた子どもの発達に長期的にどれほどの影響力を持つのか、より長期的な視点から縦断的検証を行うことが必要とされる。これまで、妊娠期の母親の子どもについての表象は、乳児期の子どものアタッチメントに焦点化した生後 12 ヶ月までの短期間の追跡に終始しており、幼児期までにわたる長期的な影響力については未だ検証されておらず、またアタッチメント以外の子どもの発達との関連性についても未だ明らかにされていない。今後はより長期的な視点から、妊娠期の母親の子どもについての表象が子どもの社会情動発達に及ぼす影響に関して、さらなる長期縦断的データに基づく実証的検証が求められる。

最後に、母親のみならず、父親をも対象とした実証研究の必要性が指摘できる。これまでのところ、父親を対象とした研究は報告されておらず、母親と異なり、胎内の子どもの存在を間接的にしか感じることができない父親の場合、すでに妊娠期から子ども表象を発達させることができるのか、またそうであるとしたら、父親の表象は出産後どのように連続あるいは変化するのか、母親と同じように、出生後の子どものアタッチメントと関連するのかなど、父親に関してはまだまだ未検証な問いが数多く残されている。近年、養育者としての父親への関心が高まっているが、こうした妊娠期の父親の表象に着目することで、父親となることへのプロセスの理解が深まり、さらには、父親－母親－子どもという三者関係の視点から子どもの発達を理解していくうえでも、非常に有意義な知見を与えてくれるのではないかと期待できる。

文献

- [1]Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. J. Infant-mother attachment and social development: "Socialization" as a product of reciprocal responsiveness to signals. In M. P. M. Richards (Ed.), *The integration of a child into a social world*. (Cambridge University Press, pp. 99-135, 1974).
- [2]Ammaniti, M., Baumgartner, E., Candelori, C., Perucchini, P., Pola, M., Tambelli, & Zampino, F. Representations and narratives during pregnancy. *Infant Mental Health Journal*, 13, 167-182 (1992).

- [3]Benoit, D. , Parker, K.C.H., & Zeanah, C.H. Mothers' representations of their infants assessed prenatally: Stability and association with infants' attachment classifications. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 38, 307-313 (1997).
- [4]Benoit, D., Zeanah, C. H., Parker, K. C. H., Nicholson, E. N., & Coolbear, J. "Working Model of the Child Interview": Infant clinical status related to maternal perceptions. *Infant mental health journal*, 18, 107-121 (1997).
- [5]Brazelton, T.B. & Cramer, B.G. *The earliest relationship: Parents, infants, and the dram of early attachment*. Reading, (Addison-Wesley, MA, 1990).
- [6]Cohen, L.J. & Slade, A. The psychology and psychopathology of pregnancy. In C.H. Zeanah(Ed.), *Handbook of infant mental health*. (London: Guilford Press, New York, 2000).
- [7]Emde, R.N., Osofsky, J.D., & Butterfield, P.M. *The IFEEL Pictures: A new instrument for interpreting emotions*. (International University Press, Madison Connecticut, 1993).
- [8]遠藤利彦・本島優子. 妊娠期から出産後における親の子ども表象の発達的变化と親子相互作用との連関. 2008-2010 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (2011).
- [9]Huth-Bocks, A. C., Levendosky, A. A., Bogat, G. A., & von Eye, A. The impact of maternal characteristics and contextual variables on infant-mother attachment. *Child Development*, 75, 480-496 (2004).
- [10]Huth-Bocks, A. C., Levendosky, A. A., Theran, S. A., & Bogat, G. A. The impact of domestic violence on mothers' prenatal representations of their infants. *Infant Mental Health Journal*, 25, 79-98 (2004).
- [11]Lumley, J. M. Attitudes to the fetus among primigravidae. *Australian Pediatric Journal*, 18, 106-109 (1982).
- [12]本島優子. 妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望. *京都大学教育学部紀要*, 53, 299-311 (2007).
- [13]本島優子. 妊娠期における母親の子ども表象と出産後の母子相互作用および子どもの発達との関連: 長期縦断研究 (ワークショップ「アタッチメントの視座から親子関係における主観性に迫る—実証研究と臨床実践の架橋を図って—」). *日本心理学会第 74 回大会発表論文集*, ws44 (2010).
- [14]本島優子・遠藤利彦. 妊娠期における母親の子ども表象と生後 2 ヶ月における母子相

- 相互作用との関連性. 日本赤ちゃん学会第7回大会発表論文集,p60 (2007).
- [15]本島優子・遠藤利彦. 妊娠期の母親の子ども表象と生後18ヶ月の子どものアタッチメント. 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, p575 (2009).
- [16]日本IFEEL Pictures 研究会. 日本版IFEEL Pictures 実施マニュアル(未公刊)(1998).
- [17]Pajulo, M., Helenius, H., & Mayes, L. Prenatal views of baby and parenthood. *Infant Mental Health Journal*, 27, 229-250 (2006).
- [18]Rosenblum, K. L., McDonough, S., Muzik, M., Miller, A., & Ssmeroff, A. Maternal representations of the infant: associations with infant response to the still face. *Child Development*, 73, 999-1015 (2002).
- [19]Stern, D.N. *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy.* (Basic books, New York, 1995). (馬場禮子・青木紀久代訳「親－乳幼児心理療法：母性のコンステレーション」岩崎学術出版社, 2000).
- [20]Theran, S.A., Levendosky, A.A., Bogat, A., & Huth-Bocks, A.C. Stability and change in mothers' internal representations of their infants over time. *Attachment & Human Development*, 7, 253-268 (2005).
- [21]Waters, E. The Attachment Q-Set. In E. Waters, B.E., Vaughn, G. Posada, & K. Kondo-Ikemura(Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models.* *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60 (2-3, Serial No.244). 247-254 (1995).
- [22]Waters, E., & Deane, K.E. Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters(Eds.), *Growing points of attachment theory and research.* *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50(1-2, Serial No.209), 41-65 (1985).
- [23]Wood, B.L., Hargreaves, E., & Marks, M.N. Using the Working Model of the Child Interview to assess postnatally depressed mothers' internal representations of their infants: a brief report. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 22, 41-44 (2004).
- [24]Zeanah, C.H. & Anders, T.F. Subjectivity in parent-infant relationships: A discussion of internal working model. *Infant mental health journal*, 8, 237-250

(1987).

[25]Zeanah, C. H. & Benoit, D. Clinical applications of a parent perception interview in infant mental health. *Infant Psychiatry*, 4, 539-554 (1995).

[26]Zeanah, C.H., Benoit, D., Barton, M.L., & Hirshberg, L. Working Model of the Child Interview coding manual. Unpublished Manual (1996).

[27]Zeanah, C.H., Keener, M.A., Stewart, L., & Anders, T.S. Prenatal perception of infant personality: A preliminary investigation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 24, 204-210 (1985).

[28]Zeanah, C. H., Zeanah, P. D., & Stewart, L. Parents' constructions of their infants' personalities before and after birth: A descriptive study. *Child psychiatry and human development*, 20, 191-206 (1990).

Table1 WMCI の質問項目 (概略版)

-
1. お子さんはどのような性格のお子さんですか。
お子さんの性格を表す形容詞やことばを5つ挙げて下さい。
それらのことばを説明するような具体的な出来事やエピソードを挙げて下さい。
 2. お子さんはお父さんお母さんどちらにより似ていますか。どのような点が似ていますか。
 3. お母さん側のご家族やご親族に似た特徴がお子さんに見られますか。
お父さん側についてはいかがですか。
 4. お子さんの名前はどのようにして決めましたか。
 5. お子さんはどのようなところがユニークで個性的だと思いますか。
 6. お子さんの行動のなかで最も扱いにくい行動は何ですか。
そのようなとき、お母さんはどのような気持ちになって、どのようにしたくなりますか。
 7. お母さんとお子さんとの関係はどのようなものですか。
お母さんとお子さんとの関係を表すことばや形容詞を5つ挙げて下さい。
それらのことばを説明するような具体的な出来事やエピソードを挙げて下さい。
 8. お子さんとの関係のなかでどのようなところがもっともお母さんを喜ばせてくれますか。
 9. お子さんはお父さんお母さんどちらとより親密ですか。
それはこれからお子さんが大きくなるにつれて変化していくと思いますか。
 10. お子さんはしばしば泣いたりぐずったりすることはありますか。
そのようなとき、お母さんはどのような気持ちになって、どのようになさいますか。
 11. お子さんについてお気に入りの話や出来事を教えて下さい。
 12. お子さんについて最も心配していることはどのようなことですか。
 13. お子さんの年齢を自由に選べるとしたら何歳くらいのお子さんを選びますか。
 14. お子さんの発達のなかでもっとも難しいと思われる時期はいつですか。
 15. お子さんが大人になったとき、どのような希望と不安がありますか。
-

※妊娠期に実施する場合は、すべて未来形で質問する

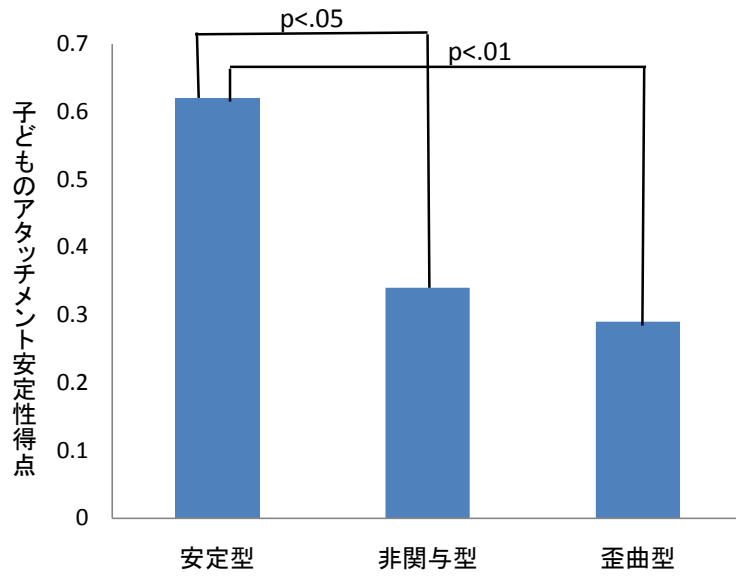


Figure1. 妊娠期の母親の子ども表象のタイプ別に見た生後18ヶ月の子どものアタッチメント安定性

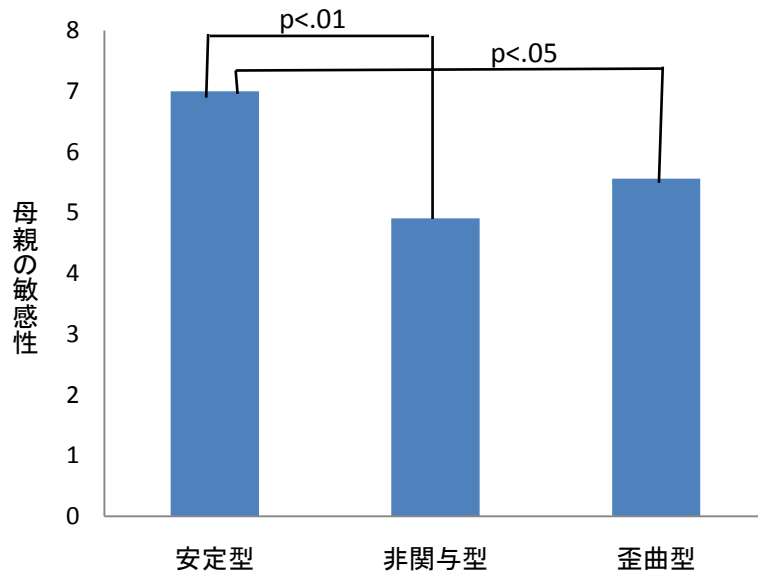


Figure2. 妊娠期の母親の子ども表象のタイプ別に見た生後2ヶ月の母親の敏感性

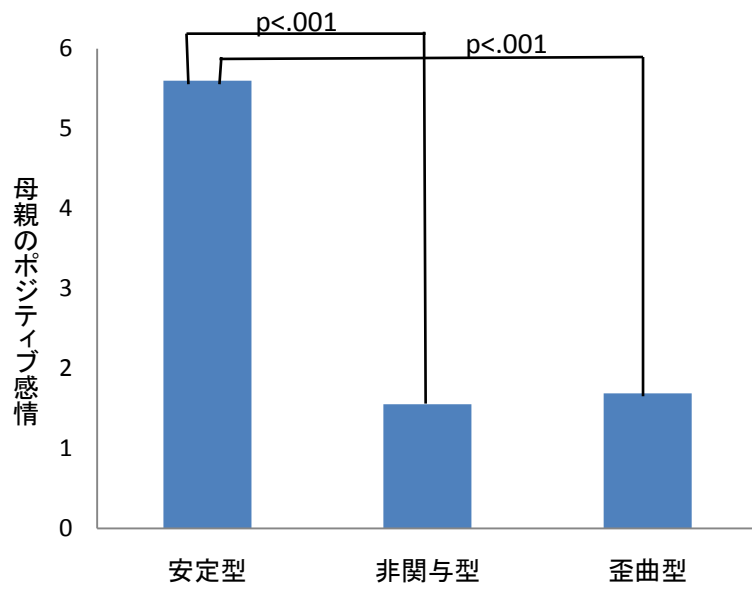


Figure3. 妊娠期の母親の子ども表象のタイプ別に見た生後2ヶ月の母親のポジティブ感情